

連続研究会「近世哲学への新視点」

竹中 久留美

2017年度連続研究会「近世哲学への新視点」は、2015年度に開催した連続研究会「哲学史のドクサを問う——〈合理論と経験論〉の再検討——」に始まり、翌年度の2016年度における連続研究会「方法論としての近世哲学」へと引継がれた我々の研究会で見出されてきた課題について検討し、我々の研究をさらに発展させる目的で開催した。

2016年度連続研究会「方法論としての近世哲学」では、2015年度に行った連続研究会「哲学史のドクサを問う——〈合理論と経験論〉の再検討——」での、近世哲学における二大潮流として合理論と経験論との区別に対する検討を発展的に継続させ行ってきた。連続研究会「方法論としての近世哲学」では特に、これまでの一般的な哲学研究において明確にされてきた各時代や地域における哲学的特徴を踏まえた上で、それらによって埋没してしまう共通性に着目し、その共通性を明確にしていくことを目指した。その共通性の明確化に向けて、昨年度私たちは、近世哲学における主軸の哲学者であるデカルト、ライプニッツや英米哲学、あるいは近世政治思想といった様々な切り口から研究を試み、さらなる課題を見出すなどの成果が得られた。また研究方法としても、通常の形式だけでなく、WEBを使つての研究会も行った。さらには、研究発表者についても、東洋大学だけでなくいくつかの他大学からの参加者や、また大学院生や非常勤講師といった身分も問わずに募ることができた。これらについても一定の成果として考えることができるものである。

それゆえ、昨年度までの研究会で見出された課題、すなわち「まさに今のリアルタイムの国内外の研究動向」について調査・検討し、また、研究内容だけでなく形式的にもさらに発展させていくために、私たちは連続研究会「近世哲学への新視点」を本年度に行った。この連続研究会でも、東洋大学の内外を問わず、さらには研究分野や時代も問わずに参加者を募り、多角的観点から議論を展開させ、昨年度まで以上に幅広く研究のネットワークを拡大させることができた。形式的には、これまでの研究会スタイルに加えて、ワークショップのような様々な参加者がそれぞれの意見を発信・討論できる場も作り、またWEBをつかった相互作用的な研究会を行うことができた。

以下は、開催回数ごとの発表者および発表題目である。

第1回 スピノザの政治思想

日時：2017年10月14日(土) 14:00-17:00

会場：6404 教室(東洋大学白山キャンパス 6号館 4階)

笠松和也(東京大学大学院人文社会系研究科博士課程)「『政治論』のテキスト校訂と訳注の問題」

寅野遼(東洋大学大学院文学研究科博士課程)「経験と最も調和するもの——スピノザ『政治論』後半部をどう読むか」

星川竜之介(千葉大学大学院人文公共学府博士課程)「スピノザは社会契約論者なのか——日本の政治思想史研究の側面から」

第2回 ジョナサン・イスラエルの啓蒙

日時：2017年11月25日(土) 10:30-13:00

会場：文学部会議室(東洋大学白山キャンパス 6号館 4階)

渡邊裕一(学習院大学非常勤講師)「ジョン・ロックの平等、民主政、寛容——ジョナサン・イスラエル『精神の革命』への応答——」

竹中久留美(東洋大学非常勤講師)「イスラエルのヒュームとスコットランド啓蒙」

第3回 デカルト初期思想

日時：2018年1月20日(土) 14:00-17:00

会場：6404 教室(東洋大学白山キャンパス 6号館 4階)

有賀雄大(東京大学大学院人文社会系研究科博士課程)「「驚くべき学問の基礎」——1619年の思索をめぐる研究の現在——」

佐藤真人(日本学術振興会特別研究員)「デカルトの方法形成の一側面——ラムス、弁証法、記憶術に抗して」

第4回 WEB 研究会&ワークショップ

【WEB 研究会】

日時：2018年2月17日(土) 14:00-17:00

会場：1503 教室(東洋大学白山キャンパス 1号館 5階)

大西克智(熊本大学准教授)「思考主体と主観性——デカルト『情念論』をめぐる——」

コメンテーター：村上勝三(東洋大学名誉教授)

【WEB ワークショップ】

日時：2018年2月18日(日) 14:00-17:30

会場：1503 教室(東洋大学白山キャンパス 1号館 5階)

今井悠介(日本学術振興会特別研究員)「クラウベルク『オントソフィア』とデカルトのEgo」

大野岳史(国際哲学研究センター客員研究員)「幾何学者の誤謬——『ポール・ロワイヤル論理学』(1664年)第四部第九章におけるデカルト主義——」

コメンテーター：村上勝三(東洋大学名誉教授)

いずれの回も10名を下らない参加があり、それぞれの回で活発な討論ができた。また、東洋大学だけでなく、東京大学、千葉大学、学習院大学、熊本大学などから発表者が集まり、さまざまな若手研究者たちが研究・討論できる場を築けた。この研究会の発展は大いに生かされるべきものであり、今後も成長させていかなければならないと確信する。

付記：2016年度開催の連続研究会「方法論としての近世哲学」についても、開催回数ごとの発表者および発表題目をここに挙げておく。

第1回 デカルトとライプニッツの対決（2016年6月25日開催）

三浦隼暉（東京大学大学院修士課程）「初期ライプニッツにおけるコナトゥス理論に関する覚書——村上勝三『知の存在と創造性』第IIを出発点に——」

富樫駿太郎（東京大学大学院修士課程）「『省察』の論証構造について——『知の存在と創造性』第II部覚書——」

第2回 英米哲学史（2016年10月1日開催）

春日亮佑（東京大学大学院博士課程）「ロックにおける道徳的知識について」

竹中久留美（東洋大学非常勤講師）「ヒュームが本当に言いたいことは何か——ヒューム研究の現状とこれから」

藤坂大佑（東洋大学大学院博士課程）「プラグマティズムと経験論的伝統」

第3回 近世の政治思想（2016年11月19日開催）

寅野遼（東洋大学大学院博士課程）「「接近」と「分離」——日本におけるスピノザ「政治思想」研究をめぐって——」

渡邊裕一（学習院大学非常勤講師）「ジョン・ロックの自然権論——保持される権利、譲渡される権利——」

笠松和也（東京大学大学院博士課程）「新ストア主義と近世政治思想の一断面——リプシウス、グロティウス、プーフェンドルフ」

第4回 修士論文の成果報告（2017年1月21日開催）

三浦隼暉（東京大学大学院修士課程）「ライプニッツにおける有機体概念とその知解可能性——シュタールとの論争を中心にして——」

本間裕之（東京大学大学院修士課程）「ドゥンス・スコトゥスの個別者理解について」

第5回 WEB講演会+研究発表（2017年2月25日開催）

村上勝三（東洋大学名誉教授）「述語としての「存在」と「存在論的証明」——20世紀英米分析哲学における幾つかの場合——」

有賀雄大（東京大学大学院修士課程）「デカルトにおける神認識の様式について——神の「包括的把握不可能性」をめぐって——」

大野岳史（国際哲学研究センター客員研究員）「人間精神の内に存在するもの——デカルトにおける「概念」とオッカムにおける「概念」——」

（なお、2015年度連続研究会「哲学史のドクサを問う——〈合理論と経験論〉の再検討——」での発表題目に関しては、『国際哲学研究』5号（pp.77-80）を参照して下さい。）